

特集インタビュー

令和時代の教育

「GIGAスクール構想の展望」

箕面市教育センター

川畑様・岩永様

1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、多様な子供たち一人ひとりに個別最適化された教育環境を整えることを目的とした「GIGAスクール構想^①」。2019年に打ち出されたこの

という府内初の試みを実施していますが、これを実施するに至った経緯を、これまでのICT教育の実践状況も含めまして、詳しくお伺いしたいです。

構想に先立って教育のICT化を進めてきた箕面市はこの構想についてどう考えているのか、またICT化に際して実際の反応はどうだったのか。ともに教員を経て、現在は大阪府箕面市教育センターで勤務されている川畑様と岩永様にお話を伺った。

——箕面市では、「全市立小中学校のすべての児童生徒にタブレットを一人一台配布する」

(一) GIGA=Global and Innovation Gateway for All

岩永・箕面市では今回のGIGAスクール構

想だけでなく、10年以上前から色々なICT関連の事業に市独自の予算で取り組んできました。特に前箕面市長の倉田さんが教育やICTにも力を入れていました。世の中にはスマートフォンやタブレットとがあまりふれているのに、学校現場では黒板とチョークだけを使っているという状態でした。そのため、国の事業として推進されていたタブレット配備を進めることで、ICT教育に取り組んできたという経緯があります。実際にICT教育に関しては、「ICTを

当たり前に」というコンセプトがありまして、「鉛筆・筆箱・タブレット」というようなキャッチコピーをもとにICT教育の推進をやってきたんですね。平成28年度の先導的教育システムの実証事業において、市内の箕面小学校をモデル校として、小学校1～6年生までタブレット端末を配備し、実際に全児童生徒に横展開していくという形で実証してきました。この平成28年度の実証結果をもとに、平成30年度に4～6年生の生徒に一人一台ずつタブレットを配備することができました。そして、実際に学力が上がったり、学習意欲が上がったりというような教育的効果が見られました。

——箕面小学校がモデル校としてタブレットが配備されたということでしたが、実際の生

徒たちや教員の方々はどのような反応でしたか。

岩永…基本的に子供たちより学校や先生たちのほうがICT教育に乗り切れてないという現状がありました。最近の子供たちは、

中学生くらいになるとスマートフォンやパソコンを持っているので、学校でタブレットが配備されて誰よりも戸惑ったのは先生たちでしたね。先生たちは、授業の中でどう使っていけばいいのかとか壊したらどうするのとか不安がありました。子どもたちはいざ使うとなると、ICTに慣れている子はどんどん使っていきますし、分かる子は分からない子に使い方を教えてあげることもあります。授業中の発表でも、今までだったら模造紙だけでまとめていたのをパワーポイントで発表する子がいたり、先生が教えていないようなことでも家で調べて、パワーポイントに動画を埋め込んで発表したりする子とかがいて、担任のほうが「こんな使い方があったんだ」と教えられることがあります。保護者の方の中でも、「普段は家でゲームをしたり、YouTubeを

見たりしてばかりの子が、学校で発表があるということで、パワーポイントの使い方をお父さんに聞いたり、YouTubeで調べたりする姿を見るとそういう時代なんだなと思うようになりました」という声もありましたね。

小学校での不安の声は全くなかったというのではないんですけど、どちらかというと「やつと」整備されたという声が多かったです。平成30年度以前からずっと「ICTを導入すればいいのに」という声が多かったの、「やつと実現するのか」という声が多かったかなと思います。ただ、小学校には先行して導入していた一方で、中学校においてはそのような現状ではなかったの、中学校の教員からは不安の声のほうが大きいかなというのが現状です。ただ、技術課程の中でプログラミング学習というのは必修化されていますし、GIGAスクール構想で全校にICTを導入するというのも箕面市だけの話ではないので、そこは箕面市の小学校が実施したような形で使っていないといけないものなのであります。しかし、ICTはあくまでツールなので、

それをつかってどのような効果的な学習を行って子どもたちに理解を促していくかというところが大事なんです。

——小学校の教員と中学校の教員では、ICT教育に対する反応に関して何か違いはありましたか。

岩永…小学校に関しては、一人の担任が全教科を教えているので、一つの教科でICTを使うと、理科や社会でも同じように使えると考える先生が多いです。一方で中学校に関しては、教科担任制になっていますので、技術・家庭ではプログラミングが必修になっている以上、必ずといっていいほど使わなければならないけど、果たして数学や理科で使う必要があるのかという問題があります。つまり、先生たちがまずICTスキルを得て、不安定な中で担当科目を教える方がいいのか、今もっている知識と経験で教える方がいいのかが難しい問題です。若い先生の方は、パワーポイントやワードの扱いに慣れているので何の違和感もなく使っていきますが、ベテランの先生や苦



手意識のある先生が、その一步をどう踏み出すかが課題かなと思います。でも、子供たちにとって一番使いやすくなりやすい方法で授業するのが教員の使命ですので、自分はどう使うことが生徒たちにとって発表しやすいのか、どうすれば目的にたどり着きやすいのかという思考力の面を支援していきたいなと思います。

——タブレットが配備された中で、黒板やノートなど、今まで使っていたアナログの授業教材はどういう扱いになつていくのでしょうか。

岩永…そこはすごく難しい問題なんです、タブレットですべて完結できるかというとそうではないと思います。ノートに書くことで覚えることもあります、一方で果たして本当に覚えることに意味があるのかというような教育の根本的なところがICTの導入によって問われているんじゃないかなと思います。僕自身の体験談になりますが、スマホやパソコンを使っていると、いざ鉛筆を持って書くときに「これ漢字あっているのかな」と感じるがあります。

しかし逆に言うと、漢字の「とめはね」のように一見不必要なことを覚える必要があるのかという点が問われているように思います。来年再来年ではなく、100年後を見るときに、鉛筆で書くという文化がまだあるのかというような問いにもつながると思うんですけど、それは保護者の方の納得や理解があつたうえで進めていけることである以上、学校と教育委員会が一緒になって、「こういう時はタブレット、こういう時はノート」というような研究をしていかなければならないのかなと思います。

——箕面市は、「一人一台にタブレットを配備する」などの革新的な方針をほかの地域に比べて早く打ち出しています。こうした迅速な対応を行える秘訣は何でしょうか。

岩永…一点目に、前箕面市長の倉田さんが教育やICTに対して熱心に取り組む意思があつたことが挙げられます。やはり市長の決定権は重要で、なにかやりたいことがあつたとしても、それに伴った予算や技術がないと進んでいきません。そういう意味で、

箕面市が恵まれた環境にあつたことが大きいと思います。

次に、学校教育に関することは教育委員会が取り扱っているのですが、学校との直接的なやり取りの指揮を執っているのは私たち指導主事^②になります。指導主事はICTに長けているのかというとそうではなくて、機械に弱い先生もたくさんいます。

ただ、箕面市においては、情報政策室という役所の中のシステム関係をすべて担っている部署がありまして、そこと連携してICTの導入を進めてきました。ですので、運用面は教育センターが担い、技術面は情報政策室が担うという連携体制を敷くことで、ICTの早期導入が実現できたと思いますね。

——今年の1月から現在に至るまで、新型コロナウイルス感染症の影響で以前のような生活様式を変更せざるを得ない状況にあります。

(2) 学校の営む教育活動自体の適正・活発な進行を促進するため、校長及び教員に助言と指導を与える職。

タブレット配備の進捗状況に関してはどのような影響がありましたか。

岩永…まず、整備面という意味ではほとんど影響はなかったです。タブレットの配備についても一週間遅れとかそのレベルですね。夏休み中には完結できたので、あまり影響なかったのかなと思います。ただ、ICTの運用面については、コロナの影響は大きくありました。良い面で言うと、ICTの活用が一気に進みました。というのも、各家庭や先生たちにおいて、オンライン学習というのは避けて通れないものだという認識が浸透したおかげかなと思います。ただ、我々としては、まずオフラインで試して、それを受けてオンラインでタブレットの活用を試すという構想を持っていた中でコロナだったので、何とかして子供たちの学習機会を保障しなければならぬという意識が先行しました。そこで急遽、タブレットの持ち帰りを認め、家で学習できるように対応したという次第なので、いろんな課題が浮き彫りになったかなと思います。

——最後に、箕面市の5年後10年後未来の教育現場をどのように変えていきたいか、どのように変えていくべきかについて伺いたいです。

川畑…そうですね。これだけICTが導入されている現状に鑑みると、僕個人としては、これを使うことが目的にならずにうまくこの付き合っていくかと思っています。自分はまだまだ教員に戻る気満々なんですけど、「この端末を使ったら今まで自分がやってきた授業がこんな風になるんじゃないかな」という期待しかないんですね。例えば、体育に関しても「これを使ったらもっと早く逆上がりができるようになるかもしれない」というような期待があります。なので、まず教員はそういったスタンスで上手にICTと付き合って授業をしてほしいなと思います。加えて、子供たちは「鉛筆・筆箱・タブレット」という標語どおり、スマートフォンを持ってくるような感じで端末を持っていて、教室や運動場でもそうですし、体育館だろうが帰り道だろうが、何か気になることがあったらすぐ

調べられようになっていけばいいですね。

岩永…これは5年後10年後に限った話じゃないんですけど、教育センターに来てよく考えるのは、子供たちが「箕面市で勉強できて良かったな」とか「箕面市で成長できて良かったな」と思える市町村でありたいなということです。自分がふと社会人になったタイミングで、「これは箕面市で育ったおかげだな」とか、「あの時の経験が良かったな」と思ってくれるような子供たちが一人でも増えてくれればいいなと思いますね。そしてICTという意味でいうと、あくまで学校現場に「タブレット」というツールが導入されたに過ぎないんですね。なので、無理にタブレットを使う必要はないと思うんです。おそらく、本当に必要な時に使われるという時代が5年後10年後にはやってくるんじゃないかなと思いますね。そういった「本当に必要なときでどういふときなんだろう」というのを子供自身が判断でき、何か自分が達成したい目標に対して、どういうアプローチがあるのかを、どの手段を用いて説明するのもかも判断しつつ、

「こうすることがいいんだ」と理由も含めて言えるようになればいいなと思いますね。説明できるということや根拠を持てるということは、ただ賢いだけじゃなくて、日常生活で友達と感情を共有したり喧嘩をしたりするなどの情操教育があったうえで成り立つものなので、まずはいろんな経験をしてほしいと思います。

——お二方、本日はありがとうございます。

（1年…梅本周晟）



川畑 寛明 （かわばた ひろあき）

箕面市教育委員会子ども未来創造局教育センター副所長。箕面市立南小学校、箕面市立とどろみの森学園での勤務を経て平成30年より現職。



岩永 泰典 （いわなが たいすけ）

箕面市教育委員会子ども未来創造局教育センター指導主事。箕面市立北小学校、箕面市教育委員会教育センター、箕面市教育委員会教育政策室での勤務を経て令和2年度より現職。